劇団 INTELVISTA 八戸公演

『新コウセンの客』

安達良春

開演を待つ舞台（十和田公演）

十年前は「自分は死ぬまで芝居を創り続けるんだ」と思っていた。五年前は「なかなか時間が取れなくなって芝居を創る回数が減ってきたけど、思いだけは昔と変わらない」と思っていた。

今は「そういや暫く芝居を創ってないどころか観てないなぁ」と思っているわけですが…。こうしているうちに死んでしまって、思いすらも残らないんだろうなぁ。

そんな自分が久しぶりに芝居を観た。劇団INTELVISTAの「新コウセンの客」。劇団INTELVISTAは1997年に旗揚げし、十和田市を中心に活動しているが八戸での公演も多い。これまでの公演も楽しんで帰っているので、鼻歌混じりで気軽に出掛けたのだが、ひょんな事から劇評を書く事になった。さて、どうしたもんか。取り敢えずもう一度イメージを掴もうと、作者の沼沢さんから台本をお借りして読んでみると、「講評でしょ。勝負よ、勝負。作品と、作った人と、こっちの」という台詞が…。そうですか、勝負ですか。そっちがその気なら、受けて立たねばなるまい。それが礼儀というもの、腹をくくって勝負しますか。まずは白旗をあげて、と…。

短編映画祭の講評を書かなくてはならない人と、それに巻き込まれた3人が、プロジェクターから映像を映し始める。3人は客席に向かって座っていて、映像は観客の後ろに映し出されている。思わず後ろを振り返ってみると、そこには今まさに客席に座って芝居を観ている自分たちの姿が映し出されている。観ていると思っていたら観られている。観ているが、観られてもいる。あげくの果てに、何だか好き勝手に感想まで言われている。笑いも交えつつ進んできた舞台は急激に奇妙な空気に変わる。この気持ち良いような、気持ち悪いような感覚が好きだ。特に舞台が近い芝居だと更に強く感じるし、それまでと変わった空気がいつまでも自分の体にまとわりついている様な気さえする。自分はこの感覚を味わう為に芝居を観にいっているのだと思う。強くこの感覚を味わえると、それだけで「面白い芝居だ」と満足してしまう。

後半。それまでとまったく違うシーンなのは、恐らく前半で3人が観ていた映画なのだろう。長蛇の列に並んでいる2人。並ぶ。とにかく並ぶ。目的は2人それぞれ。いや、並んでいる全員の目的が違うのかもしれない。少しずつ、少しずつ舞台の上を進んで行く2人。時間は過ぎていき、また空気が変わる。今度は役者の動きだった。2人しかいない長蛇の列。その中で後ろの人に押されて前の人にぶつかる。たったこれだけなのに、こんなにも空気が変わる。うーん、白旗をもう1本…。

役者の佇まい。間。遊び心…。まだまだ書きたい事はあるが、白旗が足りなくなったので今日はこの辺で勘弁してやるが、次回の公演の時も観に行きます。

最後にこの舞台から好きな台詞をひとつ。

「どうしても上手く言えない事とか、なんとかうまく分かってもらいたくてウギャーってやってるのが芸術なのよ。きっと」

芸術かどうかはさておき、もっとたくさんのウギャーを観たいし、久しぶりに自分もウギャーってやってみますかね。

十和田公演より

Friday Amusement Negative Shop　FANS(843～847回)(だべり場 2010.04)4/2,9,16,23,30 19:30開始　4/3,10,17,24,5/1 14:00開始 入場無料

演劇空間 スペースベン
八戸市柏崎1ー11ー8
☎ 0178-43-9876
FAX 050-3588-8350
☎ 080-6025-0990
HP http://spaceben.com/　Eメール owner@spaceben.com
※特別番組以外全て午後7時30分～、料金／一般400円　高校生以下100円（当日100円増）
※チケットはスペースベンにて販売。スペースベンの上演内容は、ホームページまたはメールマガジンでご確認下さい。

4月号好評発売中！

●今月のテーマエッセイ　節目
プラス志向で……冬山　純
二月三日……萬谷由香
サード……炭釜宗充
さあ、新学期……佐々木美央
Another……赤坂　敬
免許は宝もの……堰合チエ

八戸の月刊誌 うみねこ
4 月号 2010 536号
Hachinohe Monthly UMINEKO

●今月のインタビュー
マジシャンズ バブ Bacchus 店主
中村忠人（なかむらただと）さん(68歳)に聞く
読む楽しさ 読物満載
毎月ご愛読ありがとうございます
発行所／うみねこ出版社
八戸市六日町10 いわとくパルコ3F
TEL·FAX 0178-44-6636